

“A Psychology which Accords so Extensive and so Handsome a Place to Sensibility” (1) : A Study of the Bergsonian Notion of <Sensibility> in his Later Years

Ryu MURAKAMI

In another paper I pointed out that Henri Bergson (1859-1941), a French philosopher, in his early years argues on <sensibility> from a similar viewpoint to his contemporaries'. In this paper I aim to examine his notion of <sensibility> in his later years, focusing on *The Two Sources of Morality and Religion* (1932).

Although rarely pointed out, in *Two Sources* Bergson argues on <sensibility> from his particular point of view. He proposes “a psychology which accords so extensive and so handsome a place to sensibility”, where emotion gains an advantage over intellect and volition.

When we compare *The Two Sources* with *Technical and Critical Vocabulary of the Philosophy*, a French encyclopedia published in 1926, we see that Bergson has his conception in common with his contemporaries to some extent, but that on the other hand he is outstanding among contemporaries especially for his paying attention to the <superior component> of <sensibility>, which is characterized by activity and unity, in contrast to the <inferior component>, which is characterized by passivity and multiplicity.

「かくも大きく立派な地位を感性にさずける心理学」(1)

——晩期ベルクソン哲学における「感性」概念——

村上 龍

序

本稿の目的は、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) が、哲学的キャリアの晩期において、「感性 (sensibilité)」という能力についてどのように考えていたのかを、最後の主著『道徳と宗教の二源泉』(1932年) (以下、『二源泉』と略記) にそくして説明することである。

別の機会に明らかにしたように¹、哲学的キャリアの初期においては、ベルクソンは「感性」をめぐり、同時代の思想的環境にてらして特異に映るところのない議論を、大筋においては展開していた。しかしながら、あまり指摘されることはないが、彼は晩年の主著『二源泉』において、「感性」をめぐるきわめて興味ぶかい構想を、通りすがりに披歴している²。

『二源泉』の主題は、その書名からも明らかなおお、道徳および宗教の源泉を解明することに、すなわち、なにがある種の道徳的もしくは宗教的な行為を人々に演じさせ、また、ある種の道徳法則もしくは宗教上の教義を考察させるのかを、明るみに出すことにある。この目的にさいしてベルクソンは、独自の仕方規定された「感性」に重要な地位をわりあて、知情意のトリアーデのうちで「感性」を優位におく独特な観点、彼自らが「かくも大きく立派な地位を感性にさずける心理学」(D.S. 41:1012) と評する立場を、提示しているのである。その意味では、記述のためにさかれた紙幅は乏しい

¹ この点については、以下の拙稿を参照されたい。村上龍「初期ベルクソン哲学における「感性」概念——一九世紀末の「心理学講義」を中心に——」、『山口大学哲学研究』、25巻、2018年、1-22頁。

² 哲学的キャリアの進展につれ、こうした変化が生じた経緯については、以下の拙稿を参照されたい。村上龍「感性 (sensibilité)」をめぐるベルクソンの思想とその成立の経緯——一なるものと多なるものとの関係を軸に——」、『美学』、63巻1号(240号)、2012年、25-36頁。

ながら、『二源泉』という著作のなかで、「感性」概念はじつは枢要な役割を担っているとさえ言える。本稿では、知性との関係、ならびに、意志との関係に注目して、「感性」をめぐるこのベルクソンの構想を検討に付す。

本稿の構成は以下のとおりである。さいしょに、第1節において、「感性」をめぐるベルクソンの構想の独自性を査定するべく、比較のための材料としてラランドの『哲学辞典』（1926年）をとりあげ、「感性」の項目を概観する。次いで、第2節において、『二源泉』に眼を転じ、「感性」と知性との関係、ならびに、「感性」と意志の関係という、二つの関係のあいだの並行性を確認する。しかるのちに、第3節において前者の関係を、第4節において後者の関係を、順にみてゆく。その理由は、第一に、ベルクソン自身が、後者の関係について論じるにあたって前者の関係を参照するという手順をふんでいること、そして第二に、そのこととも関連してか、前者の関係に比して、後者の関係についてはベルクソンが詳しく論じていないことである。知性との関係について論じられるところをふまえたうえで、意志との関係を、明示的には語られない側面にかんしても可能なかぎり補足しつつ考察することにより、『二源泉』における「感性」の構想を我々は十全に把握することができるだろう。

第1節 ラランドの『哲学辞典』における「感性」概念の規定

本節では、ラランドの『哲学辞典』をとりあげ、ベルクソンが活躍した一九世紀末から二〇世紀前半にかけてのフランスにおいて標準的であったとみられる、「感性」概念の規定を確認する³。この用語辞典は、ベルクソンをも含めたフランス哲学会の会員たちが1902年から1923年までに重ねた討議をもとに、アンドレ・ラランド（André Lalande, 1867-1963）を編者として、1926年に刊行された。したがって、哲学上の術語にかんする、ベルクソンと同時代を生きた哲学者たちの総意が、ここには反映されていると考えられる。

³ 本節は、前掲の拙稿「初期ベルクソン哲学における「感性」概念」において、すでに公にしてある部分である。

1. 「感性」概念の外延としての「感覚」と「感情」

『哲学辞典』の「感性」の項目には、以下のような記述がみとめられる。

情緒的な (affectifs) 現象の総体。情緒的な性格を有する状態を経験し、そうした性格を有する反応を産みだす能力。「1 感性 (Sensibilité) とは、我々の内にある、あらゆる種類の感情 (sentiments) と感覚 (sensations) を経験する能力である⁴ [。]」

ここでは、一九世紀中頃に刊行された哲学便覧⁵にも依拠しつつ、「感性」を「情緒性 (affectivité)⁶」にあずかる能力として規定したうえで、その下位区分として「感情」と「感覚」を列挙している。なるほど、この項目では、「感性」という用語を「もうすこし広い意味」で捉えた場合には、「傾動 (inclinations)」、「情念 (passions)」、「快 (plaisirs)」、「不愉快 (désagrément douleur)」、「情動 (émotions)」までもが包摂されると述べられているから⁷、「感覚」ならびに「感情」が排他的に「感性」概念の外延をなすと考えられているわけでは、かならずしもないようである。しかしながら、主たる情緒的な心的状態としては、これら二者が念頭に置かれていることは間違いない。

2. 「感覚」ならびに「感情」の概念規定

それでは、「感覚」および「感情」は、それぞれどのように規定されるのか。

⁴ André Lalande (éd.), *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, P.U.F., 2002 (1926^{1re}), p. 981.

⁵ Amédée Jacques, Jules Simon, Émile Saisset, *Manuel de philosophie à l'usage des collèges*, Joubert, 1847.

⁶ なお、『哲学辞典』においては、「情緒をあたえる (affecter)」という用語が、「感性に作用をおよぼすこと」として規定されている (Lalande, *op.cit.*, p. 28)。また、「情緒 (affection)」の項目には、「外的な原因によってひき起こされた状態の変化に存する」「感性のあらゆる運動のこと」との記載がある (Lalande, *op.cit.*, p. 29.)。以上を総括するならば、ここでは、「情緒」が受動性によって規定されているものとみられる。

⁷ Lalande, *op.cit.*, p. 981.

以下、「感覚」、「感情」の順に該当箇所を引用する。

その純粋性において捉えることがほとんど不可能であるような心理的所与であるが、いわば極限に向かうようにしてこれに近づくことはできる。それは、意識のうえでの変容を産みだすことのできる生理的な刺激によって条件づけられた、生の、直接の状態であろう⁸ [。]

より専門的には、直接の有機体的原因 (causes organiques) ではなく[…] 精神的な原因 (causes morales) を有する、快や苦痛、情動⁹。

ここでは、一方の「感覚」が、「意識のうえでの変容を産みだすことのできる生理的な刺激によって条件づけられた」「心理的所与」として、他方の「感情」が、「精神的な原因」に由来する情緒的状态として、それぞれ規定されている。なお、「感情」の規定について付言すれば、「精神的な (morale)」という用語の使用にさいしては、「物体やその他の物質の対象ではなく、精神 (l'esprit) に関連する¹⁰」という語義が念頭に置かれているから¹¹、「感覚」と「感情」が、それぞれの原因におうじ対比的に規定されていることは明らかである¹²。

以上のように、ラランドの『哲学辞典』は、「感性」を情緒性にあずかる能力として規定したうえで、生理的な刺激に由来する「感覚」、ならびに、精神的な原因に由来する「感情」を、そのもとに包摂している。

⁸ Lalande, *op.cit.*, p. 976.

⁹ Lalande, *op.cit.*, p. 985.

¹⁰ Lalande, *op.cit.*, pp. 653-654.

¹¹ したがってまた、「精神的な原因」と対をなす「直接の有機体的原因」が、身体にたいする物理的な刺激を意味することは言うまでもない。

¹² なお、ここでは、「感情」の下位概念の一つとして、「情動」が挙げられている。ところで、「情動」それ自体はといえば、この用語辞典のなかでは、「突然の、しばしば激しく、強く、運動の増加もしくは停止をともなう、衝撃」として規定されている

(Lalande, *op.cit.*, pp. 278-279)。以上を総合すると、ラランドの『哲学辞典』において、「情動」という用語を用いるさいに念頭に置かれているのは、精神的な原因に由来する情緒的状态としての「感情」のうち、とくに激しく強いものであると思われる。

第2節 意志と知性に働きかける能力としての「感性」

上でもふれたように、ベルクソンは『二源泉』において、道徳の領域における「感性」と意志の関係を論じるべき文脈で、「感性」と知性の関係をひきあいにだす。そのあたりの経緯をまずは確認しておく。

ベルクソンによれば、道徳的な行為を、その遂行にはつねに「緊張状態」がともなう「かた苦しく、きびしい」振舞いとみなすのは間違いであり、この点こそが多く の道徳上の理論にとって躓きの石となっている¹³。なるほど、道徳的な行為の遂行にさいしてすくなからず「努力」せねばならないこともある。しかしながら、ベルクソンに言わせれば、それはあくまで「例外的な」場合でしかない。「家庭生活を営み、また、職業に従事する」うえで我々は「たえず選択をせまられる」が、そのさい、「規則に合致しているもの〔行為〕のほうを自然にえらぶ」のが、むしろ実情ではないだろうか。ベルクソンはこのように、道徳的な意志決定がしばしば自ずと下されるものである点に、まずは注意をうながす (D.S. 12-14 : 990-991)。

それでは、なぜ諸々の道徳的な行為はそのように自ずと遂行されるのだろうか。ベルクソンによれば、多くの場合、それは習慣のなせるわざである¹⁴。たとえば、我々は「両親や先生の言うことをきく習慣を身につけてしまった」がゆえに、いまでもある一定の振舞いを自ずと遂行し、もしくは、自重する (D.S. 1 : 981)。そもそも習慣とは「我々の意志に圧力をくわえる」ものであり (D.S. 2 : 982)、道徳的な責務についてもその例外ではないというわけである。

ところが、やはり自ずと道徳的な意志決定が下されながら、それが習慣に起因しない場合もあるとベルクソンは言う。そこで念頭に置かれているのは、

¹³ ベルクソンは、「とりわけカントにむすびつく哲学者たち」(D.S. 14 : 991) を念頭に置いている。

¹⁴ 本稿では、ベルクソンの「習慣」概念にまで考察の範囲をひろげる余裕がない。これを主題的に扱った研究には、年代順に以下のものがある。三輪正「ベルクソンと習慣の問題」、『哲学研究』、40巻7冊(465号)、1959年、451-582頁。三宅中子『習慣と懐疑——モンテーニュ、パスカル、ベルクソン——』、南窓社、一九八五年。Su-Young Park-Hwang, *L'habitude dans le spiritualisme français, Maine de Biran, Ravaisson, Bergson*, Atelier national de reproduction des thèses, 1997.

当該の行為が、「範例 (exemple)」ないし「模範 (modèle)」となるべき人物の「模倣」であるような場合である¹⁵。なるほど、ベルクソンの言うとおり、自らの憧れる人物に倣って行為するときには、我々の意志決定は習慣に依ることなく、それでもたしかに自ずと、いわば「呼びかけ (appel)」¹⁶に素直に応じるようにして下されるだろう (D.S. 30 : 1003)。そして、「習慣[…]をのぞけば、意志に直接働きかけるのは感性をおいて他にない」(D.S. 35 : 1008) と考えるベルクソンにしたがうならば、この意志決定は「感性」のなせるわざである。先述のように、意志にくわわる「圧力」が習慣を経由するのだとすれば、意志への「呼びかけ」は「感性」を経由するというわけである。

さきほどの、「意志に直接働きかけるのは感性をおいて他にない」という力強い主張のあとで、ベルクソンはさいしょに「感情によってあたえられる推進力」に言及し、その一例として「恋愛の情念」を挙げる。そして、それにひきつづいて彼は、「情念にまでゆく必要はない」と言い、「もっともおだやかな情動」の一つである「音楽上の情動」に話題を転じ、しかもそのさい、「喜び」や「悲しみ」など「音楽が表現する」様々な「情動」を、「感情」という用語によって換言する (D.S. 35-36 : 1008)。してみると、「感性」が意志にたいして働きかけるものであることを主張するとき、ベルクソンは、「感性」のもとに「感情」、「情念」、「情動」を、それら相互のあいだの種差には

¹⁵ 「範例」ないし「模範」と「模倣者」とがとり結ぶ関係、わけでも、前者から後者に発せられる「呼びかけ」については、ベルクソンは『笑い』(1900年)においてすでに、作品を介してとり結ばれる芸術家と鑑賞者との関係にそくして、これを論じている。Cf. R. 115-125 : 458-465.なお、『笑い』の議論と『二源泉』のそれとのあいだの関連性については、以下の三つの拙稿を参照されたい。村上龍「創造性の伝播——ベルクソンにおける藝術的コミュニケーションの問題——」、『若手美学研究者フォーラム論文選』、2004年、18 - 27頁。村上龍「創造性の伝播——ベルクソン美学への一視座——」、『美学』、57巻1号(225号)、2006年、28 - 41頁。MURAKAMI Ryu, “Transmission of Creativity; An Essay on the Aesthetics of Henri Bergson,” *Aesthetics*, 13, 2009, pp. 45-57.なお、瀧一郎は、この文脈にかんずるかぎりでは、ベルクソン哲学における芸術と道德の関係を考察している。Cf. 瀧一郎「作品と英雄——ベルクソンにおける美学と倫理学との接点——」、『美学芸術学研究』、11号、1992年、41 - 74頁。

¹⁶ ベルクソンの「呼びかけ」概念に注目し、そこに他者論の可能性をさぐる論考として、以下のものが挙げられる。杉山直樹『ベルクソン 聴診する経験論』、創文社、2006年。

とくに頓着せずに包摂しつつ、これらが我々の行動におよぼす影響を問うているわけである¹⁷。

じっさい、「感情」や「情念」、「情動」などには、否応なき「行動の要求 (exigence d'action)」が、しかも、総じて行為者のがわの「抵抗に出会うことがない」ようなそれが (D.S. 35-36: 1008)、たしかに含まれている。たとえば、ベルクソンが適切にも例示するように、「恋愛の情念」に身をやつす者はしばしば、やむにやまれぬ要求に、しかもすすんで従いつつ、盲目的に振舞う (*ibid.*)。それゆえ、「感性」からの働きかけをうけて自ずと道徳的な意志決定が下される場合があると言うベルクソンも、さほど突飛な主張をかかげているわけではないのかもしれない。とはいえ、そこで言われる「感性」から意志への働きかけの内実、あるいは、「感性」に属する心的事象から行為への発展の詳細については、さらなる説明が求められるだろう。しかしながら、ベルクソンはこの点を、それ自体としては詳述しない。彼はむしろ、「感性」と知性の関係を論じることによって、自らの議論を深めようとする。つまり、ベルクソンの考えでは、「感性」は、意志にたいするのと並行的な仕方、知性にたいしても働きかけるのであり、「感性」に属する心的事象は、行為へ発展するのと並行的に、知性に属する心的事象へも自ずと発展しゆくのである¹⁸。

第3節 「感性」の知性にたいする働きかけ

本節では、前半部において、「感性」概念にかかわるベルクソンの用語法を確認したあと、後半部において、「感性」に属する心的事象が知性に属するそれへと発展する局面について論じられているところを追う¹⁹。一連の考察をへて、我々は『二源泉』における「感性」概念を、知性との関係にそくする

¹⁷ 「感性」その他の諸概念の規定については、第3節で扱う。

¹⁸ ベルクソン自身がこの並行性に言及している箇所としては、たとえば次の一節が挙げられる。「新しい道徳より以前、あたらしい形而上学より以前には情動があって、これが意志のがわではエランへ、知性のうちでは説明的な表象へと、のびてゆくのである」(D.S. 46: 1016)。

¹⁹ 本節の一部については、前掲の拙稿「「感性 (sensibilité)」をめぐるベルクソンの思想とその成立の経緯」において、そのダイジェストをすでに公にしてある。

かぎりでは把握することができるだろう。

1. 受動的かつ能動的な能力としての「感性」

そもそも、ベルクソンは「感性」という用語を用いるさいに、どのような心的事象を想定しているのだろうか。

我々は先に、ベルクソンが「感情」、「情念」、ならびに「情動」を、それらのあいだの種差には頓着しないまま、「感性」という類概念のもとに包摂していることをみた。まずはその延長線上で、ベルクソンが「感性」概念の外延についてどのように考えているのか、その点にかんする我々の理解を補完することから始めよう。

1-1. 「感性」概念の外延としての「感情」と「情動」

上でみたとおり、ラランドの『哲学辞典』においては、「感覚」もまた「感性」概念の外延に数えいれられていた。ベルクソンは「感覚」をどのようにとり扱うのだろうか。

二つの種類の情動、二つの品種の感情、感性の二つの表れ方 (*deux manifestations de sensibilité*) を区別しなければならない。というのも、それらのあいだで共通するのはただ、感覚とはことなる情緒の状態であること、それゆえ、感覚のように物理的な刺激の心理面への転換には還元されないこと、のみだからである (D.S. 40 : 1011)。

情動などの「区別」についてはひとまず措き²⁰、ここで押さえておきたいのは次の点である。ベルクソンは、「感覚」、「感情」、「情動」、ならびに「感性の表れかた」の四者をひとしく「情緒の状態」としながら²¹、ただし、前一

²⁰ この点については、本節1-2. で扱う。

²¹ 「情緒」については、『二源泉』ではこれ以上は詳しく論じられない。一九世紀末のリセにおける講義では、ベルクソンはこの概念を、一方で受動的であり、他方で表象を含まないという、二重の特徴によって規定している (前掲の拙稿「初期ベルクソン

者と後三者とを、「物理的な刺激の心理面への転換」への還元可能性にてらして区別している。

上の引用文をみるかぎりでは、「感情」、「情動」、「感性の表れ方」の三者がそれぞれ別個に扱われているようにも、したがってまた、「感情」および「情動」は「感性の表れ方」ではないとされているようにもとれる。しかしながら、我々は以下の諸点に留意せねばならない。第一に、この引用文をふくむ段落、しかも、「感情」、「情動」、「感性の表れ方」の三者のうちでもつばら「情動」への言及に終始するこの段落を総括してベルクソンは、先にもふれたように²²、「かくも大きく立派な地位を感性にさずける心理学」と自ら評していること。そして第二に、あとであらためてみるように²³、この引用文をふくむ段落のなかでベルクソンは、「情動」を「感性の動揺」の語によって換言していること。以上に鑑みるならば、「感情」、「情動」、「感性の表れ方」が併記される上の引用文を、我々は、ひとしく「感性」概念のもとに包摂される、「感情」、「情動」、ならびに、おそらくは既出の「情念」など²⁴が該当すると思われる、その他の「感性の表れ方」、この三者について語る一節として読まねばならないだろう。

してみると、ベルクソンの用語法のうえでは、「感覚」とは異なり、物理的な刺激に由来するわけではない情緒の状態が、ときにおうじて「感情」、「情動」、「情念」等々と呼びわけられながらも、ひろく「感性」という能力に属する心的事象として一括されるようである。しかも、著作の全体をつうじて、「情念」をはじめとしたその他の「感性の表れ方」に論及する箇所はきわめて少ないから、ベルクソンはとくに「感情」と「情動」を、「感性」概念の主たる外延とみなしていると考えてよいだろう。

さて、そうだとすれば、ベルクソンは、「感性」に属する心的事象を「情緒

哲学における「感性」概念を参照されたい。これから本稿でみるように、『二源泉』においても、この考え方がある程度は踏襲されていると考えてよい。ただし、晩年のベルクソンは、一方で「感性」をまったく受動性によって規定することはないし、他方、「感性」における表象的な成分の不在についても、『二源泉』にそくするかぎりには、一定の留保をつけなければならないだろう。

²² 本稿序を参照されたい。

²³ 本節1 - 2. で引用する一節を参照されたい。

²⁴ 本稿第2節を参照されたい。

性」によって規定する視点を、ラランドの『哲学辞典』と共有しながらも、「感性」概念の外延に於いては、これと見解を異にしている。なるほど、ベルクソンもまた、「感性」概念のもとに「感情」を包摂している。しかしながら、彼は第一に、『哲学辞典』と同様の仕方で規定された「感覚」を、ただし、この用語辞典がそうするのとは異なって、「感性」の外延には数えられない。そして第二に、ベルクソンは、『哲学辞典』がそうしないのとは異なって、「感性」概念の下位区分を問題とするうえで、「情動」という用語を重く用いるのである。

1-2. 「感性」概念の「知性 - 以下の」成分

上の引用文では、「感性」に属する心的事象のなんたるかについて、ベルクソンはあくまで否定的にしか語っていない。積極的な語り口においては、それはどのように規定されるのか。

先述のとおり²⁵、ベルクソンは『二源泉』において、「感性」の下位概念にあたる「感情」や「情動」などの用語を相互に交換可能な仕方で用いており、したがって、彼はこれらのあいだの種差には頓着していない²⁶。ベルクソンにとって重要なのはむしろ、上の引用文中でも言われていたように²⁷、「感情」や「情動」を二つに種別することである。この点に於いて、ベルクソンは「情動」を例にとり、次のように述べる。

第一の場合、情動は表象された観念ないしイメージに由来する。つまり、感性的状態 (*l'état sensible*) が、それになんら負うところなく自足している知性的状態 (*l'état intellectuel*) の結果として生じるのであ[る]。…] それは、表象が飛びこんでくることによって起こる感性の動揺である。ところが、もう一方の情動は、これに先行し、また、これとは別個

²⁵ 本稿第2節を参照されたい。

²⁶ ただし、のちにもふれるとおり、「知性 - 以上の」情緒的状态について論じるさいには、ベルクソンは相対的に、「情動」という用語を多用する。とはいえ、その文脈で「感情」という用語がまったく用いられないわけではない。Cf. D.S. 78-80: 1041-1042, etc.

²⁷ 本節1-1. を参照されたい。

のままであり続ける、そのような表象によってひき起こされるのではない。むしろそれは、やがて生じる知性的状態にたいして、もはや結果ではなく原因となるだろう。この情動は諸々の表象をはらんでおり (*grosse de représentations*)、そのいずれもがきちんと形づくられていないが、情動は有機的な発展によってそれらを自らの実質よりひき出すのである、あるいは、ひき出そうとすればひき出せるだろう (D.S. 40-41 : 1011-1012)。

ここでは、知性に属する心的事象とのあいだの先後関係もしくは因果関係の点から、「感性」に属する情緒的状态が二様に規定されている。当該事象の一半は、これに先んじて出来あがっている「観念」や「イメージ²⁸」などの「表象」によって「ひき起こされる」情緒的状态である。これにたいし、残りの一半は、むしろそれら「表象」をいまだ「形づくられていない」萌芽的な段階において「はらんで」いて、これを自らの「有機的な発展」によって「ひき出す」ことのできる、そのような情緒的状态である。ベルクソンはそう言うのである。

ここで区別された二種の心的事象のうち、前者については理解しやすい。ベルクソンは具体例を挙げてはいないが、特定の人物や状況のイメージ、あるいは、特定の観念を思いうかべたさいに、付随してなんらかの「感情」や「情動」を喚起される経験は、我々にとってなじみ深い。そして、この種の情緒的状态、ベルクソンがとくに「知性 - 以下の (*infra-intellectuelle*)」(D.S. 41 : 1012) と形容する心的事象²⁹は、ラランドの『哲学辞典』において「感

²⁸ ベルクソンは第二主著『物質と記憶』(1896年)において、「イメージ (*image*)」という用語をきわめて特殊な術語として用いる。このことと関連して、多くの研究者は、とりわけ『物質と記憶』を重点的に取りあげるような場合、この用語に「イメージュ」という訳語をあてる。しかし、本稿では文脈上、そうした点に顧慮する必要がないため、以下では一貫して「イメージ」という訳語を採用する。

²⁹ 後述するように、ベルクソンは「感性」に属する心的事象の残りの一半、すなわち、観念やイメージを未形成のうちにはらんだ情緒的状态を、「価値のうえで高次であること」、「時間のなかで先行すること」、ならびに、「産みだすものと産みだされるものとの関係」の三点にてらして、「知性 - 以上の」と形容する。ここで、「知性 - 以下の」という形容詞を用いるさいにも、おそらくはその三点が念頭に置かれているのだろう。

情」と呼ばれるものに相当するだろう³⁰。

他方、後者についてはさらなる補足が必要であろう。その点はひとまず措くとしても³¹、知性に働きかける能力として「感性」を位置づけたいベルクソンにとって、あるいは、「感性」に属する心的事象が知性に属するそれへ自ずと発展することを主張したいベルクソンにとって、こちらがいつそう重要であることは、すでにして明らかである。じっさい、彼は、このように「表象を潜在的に含む」(D.S. 44 : 1014) 情緒の状態を、「価値のうえで高次であること (supériorité)」、「時間のなかで先行すること」、ならびに、「産みだすものと産みだされるものとの関係」にてらして、「知性 - 以上の (supra-intellectuelle)」と形容したうえで (D.S. 41 : 1012)、一定の紙幅をさいてこれを論じている (D.S. 40-44 : 1011-1014, 267-270 : 1189-1191)。

1-3. 「感性」概念の「知性 - 以上の」成分

上述のように、「感性」に属する心的事象のなかに「知性 - 以上の」と形容されるべき種類のものが存することを、ベルクソンは主張する。だが、「感情」や「情動」などの情緒的状态が、たとえ萌芽的な段階においてもせよ、いかにして観念やイメージなどの表象をはらみうるのか。諸々の表象を潜在的に含んだ情緒的状态というものを、我々はどのように理解したらよいのだろうか。この点について、ベルクソンは明示的には語ってはいない。そこで、我々としては、「知性 - 以上の」情緒的状态の代表的な事例として折にふれ言及される、芸術家や文学者³²のやどす「情動³³」にかんする記述に手がかりを求めつつ、考察を深めることにしたい。

³⁰ 先にみたように、ラランドの『哲学辞典』においては、「感情」は「精神的な原因」に由来するものとされる。本稿第1節を参照されたい。

³¹ この点については、本節1-3. であつかう。

³² ベルクソンはときに、等位接続詞を介して芸術と文学を併記する。つまり、「文学」が、類概念としての「芸術」のもとに包摂されない場合があるのである。言及される諸事例をみるかぎり、そうした文脈では、「芸術」は造形芸術ならびに音楽をその種とする類概念とみなされているようである。Cf. R. 115 : 458, D.S. 43 : 1013.このような用語法にも顧慮して、ここでは芸術と文学を並列する。

³³ なお、「知性 - 以上の」情緒的状态に言及するさいにベルクソンが用いる用語は、ここでもやはり「感情」ではなく「情動」である。

1 - 3 - 1. 「創造の要求」を含んだ情緒的状态

「天才的な作品はたいていの場合、その種のものとしては二つとない情動 (émotion unique en son genre) から生まれたのだ」(D.S. 43:1013) とベルクソンは言う。むろん、このように述べることによって彼が主張したいのは、ひとつには、「情動」の「二つとない」独自性が作品の非凡さに結びついたということである³⁴。しかしながら、ここでベルクソンにとっていっそう重要であるのは、こうした「二つとない情動」が、「ひとたび実現された当の作品によってようやく満たされるにいたる」であろう「特定の (déterminée)」 「創造の要求 (exigence de création) ³⁵」を、それ自身のうちに含んでいるということである (D.S. 44:1014)。してみると、芸術家ないし文学者のやどす「情動」は、自らのほらむ未形成の諸表象を「有機的な発展によって」「ひき出そうとすればひき出せる」どころか³⁶、むしろそうした発展に手を貸し、自らを満足させる一定の諸表象を形成するよう、芸術家や文学者にたいし要求するものであり、したがって、ベルクソンにしたがえば、芸術的もしくは文学的な創作とは、すくなくとも天才的な芸術作品が問題となるかぎりでは、このような「創造の要求」に応える営みに他ならないということになる。

創作の営みが、そのように創り手の統制下に収まりきらない側面を多分に有するもののだとして、それでは、芸術家ないし文学者自身の領分はどこにあるのだろうか。自らの統制のもとで彼らが演じることになる役まわりとはいかなるものか。この点についてベルクソンは、ベートーヴェンに言及するくだけで以下のように述べる。

ベートーヴェンの交響曲以上によく構成され、手のこんだものがあるう

³⁴ この点については、本稿の続編においてあらためて扱う。

³⁵ 「感性」から意志への働きかけに論及するさいにも、「感性」や「情動」が「行動の要求」を含むものであることを、ベルクソンは主張していた。本稿第2節を参照されたい。

³⁶ 本節1 - 2. でみた引用文を参照されたい。

か。だが、配列し、配列しなおし、選択するといった、知性的な平面のうちで続けられる仕事のあいだじゅう、この音楽家はその平面の外に位置する点へと遡って、そこで是認されるか拒絶されるかをうかがい、進むべき方向をさぐり、インスピレーションを求めたのである。この点には、不可分な情動 (une indivisible émotion) がやどっていて、知性はおそらくそれが音楽となって表現されるのを助けただろうが、この情動それ自体は音楽以上のものであり、知性以上の (plus qu'intelligence) ものであった (D.S. 268 : 1190)。

ここでは、ベートーヴェンの創作の現場が、おそらくは推測にもとづいて描写されている。この音楽家は、自らのやどす「知性 - 以上の」「情動³⁷」へと逐一「遡って」「進むべき方向をさぐり」ながら、「配列し、配列しなおし、選択する」といった高度に「知性的な」作業をつうじて、「情動」が「よく構成され」た一定の楽曲として「表現されるのを助けた」のだとベルクソンは言う。つまり、芸術家や文学者は、もっぱら知性的な面で立ちまわることによって、「知性 - 以上の」「情動」が一定の諸表象へと発展しゆくのを助けるのである。

このように、「知性 - 以上の」情緒的状态は、諸々の表象を潜在的に含むどころか、それらの実現を知性的な側面で助けるよう、積極的にうながしさえするものとされる。それゆえにこそベルクソンは、「感性」に属する心的事象のすくなくとも一半が、知性に属するそれへ自ずと発展することを主張し、「感性」を知性に働きかける能力として位置づけるのである。

1 - 3 - 2. <情緒的=触発的>状態

ところで、芸術家や文学者はいったいどのような経緯から、こうした「創造の要求」を、しかも一種の情緒的状态として、抱えこむことになるのだろうか。この点にかんして、文筆の仕事に論及するくだりで、ベルクソンは以

³⁷ 引用文中では、この情動が「不可分な」ものである点にもふれられているが、それについては本稿の続編においてあらためて扱う。

下のように述べる。

その要求をやどす精神も、これを十全に感じえたのは生涯に一度きりだったかもしれないが、それでも二つとない情動として、あるいは、事物の根底そのものから受けとった振動 […] として、それはつねにそこにある (D.S. 269 : 1191)。

ここでは、文学者のやどす「情動」、「創造の要求」を内に含んだこの「情動」が、「事物の根底そのものから受けと」られるものであると言われている。「著者と主題との合致から」「独自で二つとない情動」の「生まれ」ることが述べられている別の箇所をも併せて勘案するならば (D.S. 43 : 1014)、次のように考えることができよう。ようするに、芸術家や文学者は、自らの主題となるべき事象から、いまだ実現されたことのない「独自で二つとない」可能性を潜在的な諸表象として汲みとり³⁸、というよりはむしろ託され、それに付随して魂を情緒的に「振動」させるのである。たとえば、美的な喜びの源泉としての可能性をそこに見だし、山岳にまつわる西洋人の表象を一変させることになるルソーが、その原点において「あたらしい独自の情動」(D.S. 38 : 1009) を受けとっていたように³⁹。

ある種の情緒的状態が、自らのほらむ萌芽的な諸表象を展開するよう求めてくるという事態を、我々はこのような意味でこそ理解することができる。「感覚」が物理的刺激に、「知性 - 以下の」「感情」ならびに「情動」が観念やイメージなどの表象に、それぞれ由来するのにたいして、「知性 - 以上の」「感情」や「情動」は、いまだ実現されざる可能性をひめた他なるものに由来する、そのようなく触発的＝情緒的 (affectif) > 状態なのである。なお、先にみたところからも明らかのように、ラランドの『哲学辞典』においては、

³⁸ ジル・ドゥルーズの卓抜した論考が上梓されて以降、ベルクソン哲学における「可能性」概念と「潜在性」概念とのあいだの異同が様々に論じられている。しかしながら、本稿では文脈上、この点にはとくにこだわらない。Cf. Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, P.U.F., 1966.

³⁹ ベルクソンはまた、わが子のはらむ「複数の可能性」を予見する母親の「感性」などにもふれている (D.S. 41 : 1012)。ただし、その場合には、当の可能性を展開するのは母親ではないだろう。

「感性」の「知性 - 以上の」成分へのこのような着眼、しかも、この用語辞典では「感性」の主たる外延とはみなされない「情動」という用語を多用しつつ示される着眼は、みとめられない⁴⁰。

ここまでの考察から、以下のことが明らかとなった。

ベルクソンにとって、「感性」という能力に属する心的事象は、まずもってなんらかの情緒的状态であるが、ただし、それはけっして物理的な刺激に由来するものではない。そして、物理的な刺激には由来しない情緒的状态は、ときにおうじて様々に呼びわけられるけれども、ベルクソンがとくに頻繁に言及するのは「感情」と「情動」であるから、彼の考えにしたがうとき、「感性」の主たる外延をなすのはこれら二者である。

とはいえ、「感情」と「情動」のあいだの種差については、ベルクソンはとくに何も語らない。彼にとって重要なのはむしろ、「感情」ないし「情動」を二つに種別することである。

そのうち第一の種は、自らに先んじて存する観念やイメージなどの表象によってひき起こされる、その意味で「知性 - 以下の」と形容されるべき情緒的状态である。したがって、ベルクソンの考えでは、「感性」とはその一半において、これら表象から付随的に情緒上の効果をこうむる、そのかぎりでの受動的な能力である。

これにたいして、第二の種は、知性に属する心的事象とのあいだの先後関係もしくは因果関係にてらして、「知性 - 以上の」と形容されるべきものである。というのも、それは、いまだ実現されざる二つとない可能性を他なるものから受けとったことに付随する「魂の情緒的な振動」(D.S. 40 : 1011) に他ならず、またそれゆえに、一定の諸表象を形成するよう求める「創造の要求」として感じられることになる、そのような情緒的状态だからである⁴¹。したがって、ベルクソンの考えでは、「感性」とは残りの一半においては、未

⁴⁰ ラランドの『哲学辞典』については、本稿第1節を参照されたい。

⁴¹ 上の註21でふれておいた、『二源泉』における「情緒」概念の規定をめぐる留保とは、まさにこの点にかかわるものである。ようするに、この概念が表象の不在によって規定されうるとしても、「知性 - 以上の」情緒的状态をめぐる問題となる、潜在的な表象の含有については、そのかぎりではないのである。

展開の可能性を受容する、そのかぎりを受動的な能力であると同時に、他なるものからの「呼びかけ⁴²」に応じ、受けとった可能性を実現に導くよう知性に働きかける、そのかぎりでも能動的な能力でもある⁴³。

そして、すくなくともラランドの『哲学辞典』によるかぎりでは、同時代の思想的環境に鑑みて、「感性」概念をめぐるベルクソンの用語法は、外延にかんする「感覚」の除外と「情動」の重用、ならびに、「情動」の語を多用しつつなされる、「知性 - 以上の」成分への着眼という二点において、独自性を有すると言うことができる。

凡例

ベルクソンの著作からの引用は *Œuvres, édition du centenaire, André Robinet (éd.), P.U.F., 1991 (1959^{1re})* に拠り、以下の略号とともに、単行本、著作集の順に頁数を () 内に記す。

R. : *Le Rire*, 2007 (1900^{1re}).

D.S. : *Les deux sources de la morale et de la religion*, 2008(1932^{1re}).

⁴² 範例的な存在が摸倣者をして自ずとある種の意志決定へと傾かせる場面に論及するさい、ベルクソンは、「感性」をつうじた意志への「呼びかけ」について語っていた。本稿第 2 節を参照されたい。

⁴³ 我々がみてきたように、そして、ひきつづきみてゆくことになるように、「感性」のこうした「知性 - 以上の」成分を論じるうえで、ベルクソンはしばしば、芸術的もしくは文学的な創作の場面、しかも、天才的な作品に結実するであろうそれにそくして、話をすすめる。とはいえ、彼は「感性」のこの成分を、一部の特権的な人々に独占させるわけではない。たとえば、上の註 39 でみたように、わが子を目のまえにした母親の「感性」などにも彼は論及している。あるいはまた、山岳を目のまえにしたルソンの「感性」への言及を、我々は本文中で確認したが、ベルクソンはそのくぐりで、ルソンの受けとった「情動」がその後、「一般に流布した」ことを併せて述べている (D.S. 38 : 1009)。さらには、文学的な創作の場面にそくして議論を展開するさいにも、たとえば、「詩人の魂のうちに生じた」「その種のものとしては二つとない」「情動」が、作品を介して、こんどは読者たる「我々の魂を振動させる」ことについても (D.S. 44 : 1014)、ベルクソンはやはり併せてふれている。